

事務局

エルシティオ内

金城清弘・山本周子

〒640-8319

和歌山県和歌山市手平6丁目112-1 Tel 1073-424-5449

集まる機会をつくりましょう

まず始めに、去る3月11日、東日本大震災の影響でお知り合いが被災された方々にお見舞い申し上げます。またこの未曾有の大災害の影響で、第30回全国夏季セミナー（埼玉）は冬季12/24あたりに規模を縮小して延期することとなりました。報告いたします。

さて、視点を学校に移してみると、現場の忙しさについては年々増すばかりで、とてもゆっくりと子どもたちに接することができない毎日です。新学期は特にクラス替えをし、子ども達をゆっくり観察しながら、どう接したらいいのかやどんな教材が適しているのか、また学年でどんな取り組みをしたらいいのかなど、しっかり話し合う時間が大切です。しかし、現実には、本校の場合、連日の保健行事、そして息のつくまもなく学習参観、家庭訪問の計画・実施とめまぐるしく動く毎日で、勤務時間を超えても帰宅できず、毎日がオーバーワーク状態です。

こんな状況ですが、同じ志を持つ者が集まるのがサークルです。今年忙しい中でも工夫して、各サークルで知恵を出し合い、集まりましょう。集まれば何か良い考えが浮かびます。それがなくても職場でなかなか言えなかったことが言えることもあるでしょう。愚痴を出し合う中で交流し、情報も交換できるかもしれません。とにかく皆さん、集まりましょう。そしてお互いを元気づけていきましょう。（会長 岩田清彦）

もくじ

巻頭言	1
第20回近畿セミナー報告	2～16
事務局より	16～17

記念講演

第20回近畿セミナー記念講演報告

今こそ若者に伝えたいこと

河野美代子さん

(産婦人科開業医)

いつものように柔らかな口調で講演が始まりました。そして「近畿の性教協で話をするのはとっても元気になります」ということばをいただきました。

医者になって30年あまり。そしてあの有名な『さらば、悲しみの性』が出版されて20年ほど。その間に若者たちの性の実態がどうなったのか——河野さんは「あのときと同じことがまだある。いやそれ以上にしんどいことが彼ら彼女らにある」と言われます。そんな実態があるのに、河野さんを顧問としている教育委員会がつくる教材でさえも『性感染症』を扱うときにも“性交”や“キス”という言葉を使うことを認めない、中学生で『避妊』を扱うことは認めないという厳しい現実があるのです。一方で、彼女は今、兵庫県宝塚市にある中学校12校すべてで「いのちの教育」として講演をしています。当初は強引ともいえるこの取組の導入に、学校現場のなかには消極的で厳しい受け入れ態度だったところもあったようです。しかし、彼女の話の内容やそれを聴く生徒たちの様子からその対応は変わってきているようです。やはり、生徒のニーズにあった、彼らの心を動かす話は必要とされているという証だと私は思いました。

講演はこのあと、彼女が関わってきた若者たちにおきている現実が語られました。『さらば、悲しみの性』の世代のときよりもしんどいという言葉通りの実態を聴きながら、ひとりの若者にこんなことがおきているのに、どうして性教育の実践が広がらないのだろう…と悔しい思いでいっぱいでした。「中学校や高等学校で行われる性教育は、“中学生（高校生）向きの性教育”というその場だけの対処としてのものではなく、若者の一生を見据えたものであるべき」という彼女の言葉に重みを感じました。

「子どもたちは自分の体を知らない。それが多くの悲劇をうんでいる」と言いながら、子どもたちに教えるべきことが示されました。女性について…①月経周期

②月経痛とその対処法 ③妊娠週の数え方（ここで河野流のとおきを紹介しておきます！4月1日エイプリルフールに性交をして妊娠したら、8月13日お盆が人工中絶のリミット、12月24日クリスマス・イブに赤ちゃんのプレゼントがもらえる…）男性について…①マスターベーション ②ペニスの大きさ 男女両方にこれらのことを科学的にきちんと教えることが自分と相手のこころと体を守る一歩になるのでしょう。

若者向け彼女の講演の最後は「性は大切なもの素敵なもの、素敵な性が実行できる素敵な大人になって欲しい」というメッセージだそうです。そして、今回の講演で私たちには「性教育バッシングが続く中で、体や性を教えることの必要性を、教育現場や保護者に訴え続けたい。身の回りに一人でも大人の相談相手がいれば、救われる少女がたくさんいる。相談相手になってあげてください。とくに、性的虐待・妊娠した少女のために…」というメッセージをいただきました。

最初にも書いたように、河野さんはとっても柔らかな口調で話されます。でも、たまにチックと感じる言葉や彼女の強さが表れる一言があります。私はそんな言葉に出会うたびに、性教育を続けることの深さに気づかされます。

文責：おおえあきこ

【参加者の感想】

●「今こそ若者に伝えたいこと」というタイトルの意味を噛みしめる内容でした。最後に司会の先生が「もし河野先生がいらっしやらなかったら…」というお話をされていましたが、無責任な情報が氾濫する今、必要なのは河野先生のような方につながり、その話を聴くことができるというアクセシビリティなのだとは強く感じます。それは即ち、今日このお話を聞くことができた自分が必要な知識を必要な人に伝えていく使命を帯びているのだと感じました。昨日、大学の友人と食事をしている時、「性の教科書」をAVとし、「AVのようにしたら、彼女が喜んでいる気がする」と堂々と話していました。こういう情報格差への対応が如何に急務となるか、思い知らされるものでした。本日はありがとうございました。（J）

●私は昔から生理の時、腹痛、頭痛、吐き気…とともしんどかったのですが、母親が「薬を飲んだらいい」と薬をわたしてくれたこと、本当につらい時は家でゆっくりさせてくれたこと、受験のことを考えて「ピルをもらおう」と産婦人科へつれて行ってくれたこと…当たり前のようによくしてくれていたことにとっても感謝しました。

ひとつ恥ずかしく思ったのは28歳にもなるのに妊娠・出産について無知なこと。私は児童養護施設で働いているのですが、今まで沢山産んでも育てられずにいる保護者の方々を見てきたのですが、そういう方に限って、次々と兄弟が産まれていくことが多く、それがすごくジレンマでした。出産の選択は家族が決めるべきことで私たちは口だしできないことは分かるのですが、すごくもどかしかったんです。でも今日、先生が産まれてくる命を経緯はどうあれ、どうにかしてあげようといろんな方法を提案し、前向きに大切にされているように感じ、私も以前より前向きになれそうな気がしました。その子が自立するまでにできること、力になれること、教えてあげられること…考えながらがんばりたいと思いました。今日はありがとうございました。そして、次の休みに私も産婦人科へ行き、色々な検査を受けてみようと思いました。まず、自分の体を知って、大切にしようと思いました。(A)

●荒れている学校で人の話を10分と聞くことのできない生徒達が河野先生の2時間の話を静かに(?)聴いていた…というお話に生徒達が何を求めているのか、少し理解できた様に思う。精神的に何か満たされないまま、いろいろな事を他人のせいにして、それでいて寂しがりやな生徒達…対応していると本当に疲れますが、河野先生のように根気強く対応していきたい。子宮頸ガンワクチンについて、反対する話を聞いたりするのだが、養護教諭で反対する人が多いというお話に何故?という疑問もあります。(Y)

●たくさん症例をもとに、現在の実態がよくわかりました。話を聞くだけでも悲しくなってしまう内容がたくさんあって、正しい知識をできるだけ多くの子どもたちに伝えていくことが必要だと感じます。性教育というのは、生涯を通じて必要な知識だということ、本当にそうだなあと感心しました。当たり前のことなのに、現実にはきちんとした性教育を受けられる子どもたちはいったいどのくらいいるのか…この状態を改善していくために、私自身にもできることがあるだろうし、やっていかななくてはと思います。私自身が子どもころは性は触れてはいけないもののように感じていました。性は大切なもの、素敵なものというメッセージを多くの人を受けとり、自分のものとしてもつ社会にしていきたくと思います。とても素晴らしいお話をどうもありがとうございました。

分科会

第1分科会

たいせつなからだ

～1年生がはじめてころとからだに出会う授業～

授業者 竹崎 智子（大阪性教協）

授業者は、なんと新卒2年目の竹崎智子さん。昨年は4年生を担当。先輩の先生の見よう見まねで「二次性徴」に取り組み、子どもたちの性と生の学習に目を輝かせて取り組む様子を見て、性と生の学習を学習していきたいと思われたそうです。今年1年生を担当、1年生から丁寧にころやからだに出会わせていくことが、自分や友だちのころやからだを大切にしていける力につながるはずと、9時間計画で性と生の学習を計画し、今回はその中の「たいせつなからだ」について発表されました。

からだの名前（もちろん性器の名前も）を学び、プライベートゾーンをおさえる時は、水着の着替え方を教え子どもたちの日常にきちんと返す工夫をされていました。ダンスを踊ったり、友だちの心臓の音をききあったりと五感を使った授業は、たった一つしかない私のからだ、友だちのからだを大切にしようという気づきを自然に与えました。この学習を通して、性と生の学習は、学級経営の基盤を創る学習だと確信した竹崎さんの言葉に、納得の参加者でした。大阪性教協の金の卵の竹崎の授業は、この夏の全国セミナーでお披露目です。乞うご期待！

（大阪 多田直子）

第2分科会

助産師活用法@命の教育

兵庫サークル 助産師 岸本喜代子

病院や短大勤務のからかたわら、学校に性教育に出かけ、早や17年になります。学校によって、1年に1度の性教育ということで私に依頼されるころや、短期間に集中的に「性教育・命の教育」を養護教諭や担任、保健体育の先生などが複数

回実施し、導入部分や最後に助産師に依頼をする、という学校もあります。

多くの場所で性教育を実施してきたなかで、複数の人たち、複数の職種がさまざまな立場で連携をして命の教育をした方がより命の大切さを子どもたちに伝えられたと思いました。

その授業の実践報告を通し、連携授業の中での助産師が担える部分と、他職種と積み重ねていく授業の大切さを考えます。また、複数回実施するために乗り越えなければいけない問題を、どう解決していけばよいのか、ということと一緒に考えたいと思いました。司会には7年間も、毎年3年生には5、6時間かけて「命の教育」を実施し、その授業を受けた子どもたちが4年生になったらさらに1時間を使って授業をされている塩濱先生にお願いをして分科会を持ちました。

一つ目の学校は、先に紹介した塩濱先生の3年生の授業です。初めの4時間では、養護教諭や担任が担当し、命の始まりの精子と卵子の話、精子と卵子のくっつき方、障害のある子の話、お腹の中の赤ちゃんの様子を学習します。そのあと5時間目で妊婦さんと一緒に助産師が授業に参加し、妊婦さんへのインタビュー、胎児心音を聞き、お腹も触れさせてもらいます。最終の6時間目には、授業参観日に道德の授業で小さく生まれてきた赤ちゃんの話を担任が授業を担当されて終わります。その約1年後（4年生）には、助産師と当時妊婦さんだった方が母親となって赤ちゃんと一緒に授業に参加してもらいます。そうして成長の一連の流れや母親の思いなど体験を通して学びます。

二つ目の学校は、全26時間をかけて「誕生・成長の喜び」というテーマで小学3年生に授業をしていました。8～10時間目を助産師が担当しました。この26時間の授業の狙いは土で作った卵を自分に見立て、大切に世話をするという子育ての疑似体験を通して自分が親や家族にしてもらっていることを再確認し、自分が大勢の人々の愛情を受けて大切に育てられていることや、自分の命のかけがえのなさに気づかせていくことだそうです。その導入として「お腹の中の赤ちゃん」の話を助産師がし、つなげることができたそうです。そして最後、授業の効果として愛情を注ぐことの喜びや子育ての苦労や大変さに気づいていったということです。

三つ目は学童保育です。2年かけて行っていました。1年目は妊婦さんに協力してもらって、お腹を触らせてもらって、胎児の動きを感じる、胎児心音を聞かせて

もらう、お母さんからのメッセージやボランティアさんによる読み聞かせ、助産師によるお話を聞き、友達同士で心音を聞きあったりしていたそうです。翌年は、その時の胎児が生まれて赤ちゃんとして子どもたちとの交流を年4回もったほか、同じ月齢の子供と母親にも参加してもらい、子どもの成長、一人ひとり個性があることとそれぞれの母親の思いを学習したそうです。そして最終回で振り返りとして助産師による誕生の話を入れたということです。

こういった授業を通して、子どもたちの様子は

- * 生き生きと活動ができた。
- * 自分が育ってきた過程を知り、子供を育てる時のお母さんやお父さんや家族の気持ちはどうなのか、自分がしてもらいたいことはなにかと、考えが発展していった。また、親の気持ちを想像できたり、家族への感謝の気持ちを素直に表現することができた。周りの人々に対する感謝の気持ちを育てることに役立てることができた。
- * 友達に対して乱暴で平気でたたいたり、けったりしていた子が、乱暴を働かなくなった。
- * Aちゃんとの触れ合いをきっかけに、他の赤ちゃんへも興味と愛情を持てるようになった。専門家の話ということで、新鮮な気持ちで学習に参加できた。
- * 自分は愛されている存在だということを感じ取り、自分に少し自信が持てたようだ。

保護者の方たちの効果は、

- * 複数回「命」の学習をすることによって、保護者にも意識付けができ、子どもとの対話が増えるというだけでなく、親子関係の変化も見られた。
- * 親も、わが子が生まれた時のことを思い出し、いとおしいと思う気持ちが再確認できたようだ。

感想から考えた良い点

- * 他職種と連携をとると内容が深まり魅力ある授業ができる。

さまざまな内容で、他職種の方々と連携をとり、拡散しないように注意しつつ、うまく組み合わせながら、深まりを持つように学習を進めていくことで、「命」という抽象的なものを、言葉だけで捉えるのではなく、「命の大切さ」を“実感”できるようになる。

- * 家庭との連携で、子どもだけでなく家族も成長ができる。

子どもや家族の成長していく様子を見ると、それが指導者達の意欲につながり、次はこんなことをしたい、来年も、もう一度取り組みたいという意欲がわく。

- * 授業を担当する私たちも充実感を得て、成長ができる。

指導者たちおとなが、「子どもを育てるという責任、私たちの大切な役割」を再確認でき、私たちにとっても、大切な授業になった。

助産師として

- * 事前に学習しているので知識があり、好奇心いっぱい聞いてくれる。話した内容がす〜〜っと入る。積極的に授業に参加できる。より深く考えられている。
- * 子どもの感性に感動、驚かされるのでいい刺激がもらえる。
- * 保護者、学校の先生の感想にも、子どもたちの変化や家族の変化がみられる、また先生自身の気づきも書いてくれているので、やりがいがある。
- * 今だけではなくこれから先も先生と親しくなって、体や心の相談に応じられる。病院を紹介できる。病院で、家庭の問題や学校の先生に伝えた方が良いな、と思う子が受診をしたら、迷わずに連絡ができる。

授業をかじ取りしてくださるのは先生です。

助産師と同じ熱い思いを持って子どもたちに学んでほしいという思いがあるでしょう。ですから、どういことを子どもたちに学んでほしいのか、そのために授業

をどう組み立てていきたいのか、助産師の話の中心は何なのか、遠慮なく伝えてください。

きっといい授業になると思うのです。

誕生にまつわることや命の話はあまりにも素晴らしいことが多く、それぞれの立場で伝えたいことが多くあると思います。助産師一人で誕生の話完结するには、本当にもったいないと思うのです。また、助産師の話にも欠点があります。視点が偏ることだってあります。そういう時は遠慮なく目的を伝えていただきどういう授業にしたいのかを伝えてもらえれば、話し合いの場を持っていただければいいのです。助産師を一つの教材として使ってほしいと思います。

といった内容の発表をしました。

参加者の職種は、小・中・高校の教諭や養護教諭、保育士、助産師、人権センターの方たちで17名の参加でした。

質疑応答では、①性教育に対して反論される保護者、教師への理解をしてもらう方法として、保護者向けに授業の内容や子どもたちの感想をお便り書いて理解してもらうようにしている。②連携するにはどうすればよいかは、熱意をもって根気強くする。③さまざまな家庭背景のある子どもたちに配慮することは、今はお父さんやお母さんがいないという状況でも、受精のときにはお父さんとお母さんは必ずいたことを伝える、3年生の子どもには望まれてあなたが生まれてきたと伝える、ということでした。助産師の立場からは、(たとえ出産後すぐに養護施設に預ける子であっても) 私たちはあなたの誕生を望んだ、生まれた時はとてもうれしかったことを伝えることができる、などの話ができました。

いくつか、感想を載せます。「『助産師の強みと弱み?』を知ることができてよかったです。『性』について語る時、自分の価値観がにじみ出してしまうことに注意しなくてはと思いました。子どもを主語に、子ども自身に、感じてもらえるようにしたいです。」 「小学校で素晴らしい性教育をされているのに、中学校でつぶしているのではないかと不安に思いました。小中の連携を強くすることでさらに助産師の授業が生きてくるように感じました。」 「学校全体で性教育に対して取り組みの意識をあげていくこと、その中で助産師の方、その他の機関の方と連携を

とることが大切だということが良くわかりました。」 「実際の教育現場で、子どもたちに命の大切さを教えるにあたり、自分だけの知識だけでなく、いろんな方の手を借り、品を借りて子どもたちに伝えていければいいんだと思いました。」 「教師とのタイアップ、保護者とのタイアップ、地域とのタイアップ、必要ですね。」 その他、紙面の関係上書ききれませんでした。参加して下さった方、ご意見を下さった方、ありがとうございました。

第3分科会

テーマ「どの子にもからだといのちの学習を」

滋賀HALサークル

私達「豆の木メイト」（サークルメンバー4名）と名付け、養護施設への出前性教育の実践を始めて5年になる。きっかけは、施設職員が性協教主催の研修参加したことからである。交流する中で、子どもたちの生活の中での性行動の問題を、どのように対応すればいいのかといった悩みを聞かされた。そういった相談を受ける中で、外部からの子どもたちへの性教育の取り組みが提案された。

施設職員との打ち合わせを何度もし、職員向けの性教育研修などにも取り組みながらのスタートだった。

施設では、小学生から高校生までの子どもたちが在籍している。毎年少しずつメンバーが入れ替わったりして、年齢に応じた性教育を実践するための計画はなかなか難しかったが、毎年試行錯誤を繰り返しながらの実践を続けている。

私達が大切にしていることは、

- 1 施設で生活する子どもたちを理解する。
- 2 年齢に応じた性教育の実践計画をしっかりと練る。
- 3 できるだけ視覚で理解できるものや、具体物を準備する。
- 4 子どもの実態を見ながら、ワークショップ形式やボディアクションなど取り入れる。
- 5 科学的な知識理解をベースにする。
- 6 施設職員も参加しての学習をし、事後の子どもの様子を知る。

養護施設への出前性教育に取り組むようになって、私達の性教育に取り組む姿勢が随分と変わってきたように思う。メンバーは小学校、中学校、養護学校といったそれぞれ違った現場にいるが、それぞれの現場での実践を生かした教材作りをしている。

“どの子にもわかりやすく“というのが、私たちの合い言葉であり、どのような現場にいても、目の前に子どもたちがいるかぎり「大切なわたし、大切なあなた！」というメッセージを送り続けなければならないと考えている。

そして、いつ、どのように、どうやって性教育の学習をするのかといったことも、それぞれの現場で考え実践して行ってほしいと願っている。どの子にもからだののちの学習ができるように…。

参加者の感想より

「小学部のあったか教材素敵だった。具体的なタッチの体感の導入に“あったかおしぼり”はよかった。本当にホッとできた。」

「私の施設でも、子どもへの性教育について試行錯誤しているところだ。たくさん参考になる話でよかった。活用させてもらいたい」

「今回初めての参加です。性教育をどのように子どもたちに伝えていくのか難しく悩むことも多いのですが、模擬授業をしていただき、子どもの視点から考えることができました。性についてこれほど知らないことが多かったのか…。まず自分が正しい知識を身につかなければと思いました」

「とてもわかりやすく、楽しく聞けました。うちの施設でも、最近性教育の必要性を感じ、職員、子ども向けの性教育の準備をしているところです。カードを使ったり、ライフサイクルで考えたり、子どもと一緒に参加してのワークショップ形式がとても参考になりました」

「実践例がとてもわかりやすく、色々な教材を見せてもらい参考になりました。目の前にいる子どもたちが興味をもっていること、気になっていること、悩んでいることにアンテナを張りながら少しずつ続けていこうと思います」

(滋賀HALサークル脇野千恵)

第4分科会

中学校の養護教諭と、助産師の発表です。

参加者は、助産師9人、養護教諭5人、教諭1人の15人でした。

まず、町内の小中学校の養護部会で統一した性教育指導計画を基本に、発表者の小川先生の中学校で作成された計画についての報告がありました。

長年実施してきた性教育計画を見直し、生徒のニーズに合った内容になっています。小川先生に学校では、自尊心の低い生徒が増えてきていることから、「生命誕生」の授業の中で、自己肯定感、命の尊さを生徒に伝えたいという願いのもと、報告者の中西助産師をGTとして迎え、授業を実施することが始まりました。

助産師の中西さんからは、「生命誕生のキセキ!!!」のテーマで、プチ模擬授業を混ぜながらの報告をしていただきました。

その中身は、

- ・「助産師」という仕事について。
- ・胎内記憶について
- ・いのちのはじまりから・・・胎児の成長の記録
- ・いろいろないのちの誕生の場面を通じて・・・

命が生まれることの尊さ、生まれてくる力の素晴らしさを伝えたい

胎盤・臍帯・卵膜・羊水について

陣痛・回旋・応形機能について

自宅出産に携わる中西さんだからこそ語れる内容でした。

中西さんのGTとしての取り組みは、9年前から始まりました。

現在は、小学校、中学校、高校、養護施設で授業をされています。

中西さんは、養護施設での授業をするにあたり、悩んでいたところ、施設のスタッフの方に、「未来について語ってほしい」と言ってもらったことで、勇気が出たと話されていました。

休憩時間には、実際の授業風景のビデオを視聴しました。

協議は、ほとんどの参加者から発言があり、和気あいあいとした雰囲気でした。発言では、男子の生理をきちんと伝えることの大切さ、体育館での大人数の中での授業の難しさ、死について話すこと、自己肯定感を持ってない生徒について、負の連鎖の否定、加害者等々の話が出ました。

みなさんの取り組みや、悩み等を出し合い、アドバイスや経験談を聞くことにより、お土産を持って帰ってもらえたように思います。

感想の一部です。

☆高校で性教育を1度だけしたことがあります。

教師の中にも性教育に対する意識の違いがあり、何をどの程度まで触れていけばいいのか・・・悩みながらの実施でした。

又、教材の研究も独自に本を読んで調べるのが主で、誰かに教えていただくこともなく、これでいいのか・・・本当に不安でした。

今回、中西先生の実践を聞かせていただき、自分の性教育について振り返る事ができました。私が大切にしたいと思っていたテーマは、ずれていなかったと少し自信にもなりました。

又、反対に私の内容は高校生に合っていたのか・・・と反省する点もありました。

中学校の時から内容を組み立てられている和歌山はすばらしいと思いました。他の学校の先生方、助産師さんの活動内容を聞かせていただき悩んでいるのは私だけではない、私も頑張ろうという力をいただきました。

☆全体としてとても温かく、ざっくばらんにお話しされていたことが印象的でした。時々どう言葉を選んで伝えるか考えてしまいます。

先生も9年間色々模索され今の力強く温かいお話を作ってくられたのだと分かりました。

帝王切開のお話、ご自分の経験を通し、たくさんの人達に望まれ楽しみに思われ産まれてきたんだよ、と話されたこと、すんなり入ってきました。

他の人がする性教育を勉強する機会は少ないため、よい学びとなりました。

ビデオの中で、男子生徒が嬉しそうにベビー人形を抱きのぞき込んでいました。命の誕生・神秘に触れること、生きるということを考えること、子供達にとってもこういった時間を持つことは、本当に大切だと日々感じます。

自分の身体、人の身体、命を大切に考え、産まれてきてよかったと思える子供達が育ってくれるといいなあと考えます。

第5分科会

『多様なセクシュアリティ』の授業

京都 楠裕子さん（中学校養護教諭）

分科会参加者21名。模擬授業をしてくださった楠さんのあたたかい雰囲気と参加者の前向きな姿勢がうまく混ざった分科会となりました。

導入には性の揺らぎを感じる有名人が登場します。その人たちを“女”や“男”ということばを使って説明したり、何をみて人を“女”または“男”と判断するのかを考えたり…。後半には「性のあり方（身体の性・心の性・性的指向）」に学習したあとで、自分の性のあり方について考えました。

『多様なセクシュアリティ』の授業」と聞いたとき、私は「自分が当事者ではない“セクシュアル・マイノリティ”についての授業」というイメージ、つまり自分自身とのつながりや関係を感じない学習内容だというイメージを持っていました。でも、この授業はちがいました。導入こそ「セクシュアル・マイノリティ」を感じさせるものでしたが、学習が進むにつれ「自分は？」と考えることが増えていきました。そして、授業が終わったときには「自分の性も『多様なセクシュアリティ』のひとつである」と感じるものがあったのです。そして、この授業を自分でもやってみたい。子どもたちにも考えさせてみたいと思ったのです。

このような模擬授業のあとで、参加者から積極的に質問や感想が出されました。いくつもの気づきや考えさせられることがありましたが、そのひとつを紹介します。

「性の多様性を伝える授業の必要性はある。もしかして自分は…という生徒にとっては大きなプラスとなる授業であるだろう。しかし多くのそうではない生徒への対応が課題。性の多様性の説明はできるけれど、それ以上に、つまり自分にとって身近なもの、自分にも関係があるもの…とを感じるようにすることはできるのだろうか。」というものです。

授業者の楠さんのことばです。「性の多様性は“性教育”だから教えることができる。ここで教えないと子どもたちは知らないままに社会に出ていくことになる。だから、私はずっとこのテーマを性教育で教えているのです。」

性の多様性を教えたからそれでOK、ではない…。避妊や性感染症予防など、より現実的な内容を優先したい。だから性の多様性は取り上げられない、でもなく…。

「知らないことは排除と差別をうむ」と言います。やはり教えることがスタートです。そこからどのようにしてこの課題を解決するために実践を重ねていくのか。それらを共有しながら、すべての生徒が「自分に関わることだ」と思えるものをどう創っていくのか…。これからも考えていきたいと思えます。

【参加者の感想（一部）】

○私自身、初めて知った情報もあり、良いお話を聞かせていただきました。子ども達が普段からよく見て知っている芸能人を冒頭に挙げられており、すんなりと授業に入っていくことができました。多様なセクシュアリティを色のついた画用紙などで分かりやすくなるように工夫されており、自分も生徒の気持ちになって受けさせていただきました。楠先生が率先して自分のことにてらし合わせて話してくださいだったので、身近な事として感じやすかったように思います。(H)

○とても難しいですが、中学生で扱う内容だと思います。“自分”について深く考える時期に悩んでいる生徒は必ずいると思います。生徒になって授業を受けていて「このままの私でいいんだ」という気持ちになりました。そして、ひとりひとりちがっていいんだという感想を生徒が持てる授業だったと思います。

○とても分かりやすい講義だったと思います。ただ、実際にこの話を子どもたちにすることになると、とても難しいんだろうなと思いました。しっかりと正しい知識を知ること、その伝え方を今後、学んでいかなければならないと感じま

した。

○小学校でも多様なセクシュアリティの授業ができないかと思って参加しました。楠さんの授業でもヒントを得ましたが、そのなかでモヤッとしていた非当事者へのアプローチについて議論が深められ、とてもよかったです。この点については長くこのテーマに関わっておられる方々も、まだよりよきものを模索中もようですが、大変、いろいろな事例や考えを教えていただき、とってもやる気！！前向きになれました。ありがとうございました。(Y)

○子どもたちが学校生活で「おかま」とか「ホモ」とじゃ言い合っているのを耳にして「何か言わなければ…」と焦っているうちに、その場面が過ぎ去っていき、心のなかで「あ～あ」と思うことがあります。テレビなどで、ここ数年、セクシュアル・マイノリティの人が登場する機会がふえ、とくに子どもたちがおもしろおかしくからかいあう姿が増えたように思います。子どもたちの心にひびく、多様な性の授業実践を、ぜひ広げたいです。模擬授業、とても参考になりました。ありがとうございました。(T)

=事務局より=

全国会員募集

性教協では、地方会員とともに、全国会員を募集しています。年間会費は5000円、会期は全国セミナーから全国セミナーの一年間です。特典は、全国セミナーの割引や全国会報が届きます。この会報で全国の様子を知ることができます。ぜひ全国会員になる手続きをお願いいたします。各支部代表または和歌山県事務局までご連絡下さい。

会費の納入をお願いいたします

和歌山の会員様にお願いいたします。和歌山県事務局と致しましては、各支部の会員様からの会費がうまく入らず、未納となっている方々に早急の納入をお願いいたします。和歌山性教協としては、政治家のように他からの『献金』があるわけで

もなく、ざくざくと湧き出る打ち出の小槌があるわけでもありません。和歌山性教協の財政は、皆様方の会費そのものであります。そのことなくしては活動は成り立ちません。今こそ力を合わせて、正しい性教育の推進をする時であります。会員の皆様方のご協力とご理解をお願いいたします。

「セクシュアリティ」を購読しよう！

日本全国唯一の性教育専門誌「セクシュアリティ」。季刊誌です。年間4冊と、全国セミナー特集一冊の計5冊。申し込むと家に配達してくれます。年間7800円です。この4冊（5冊）で全国の最新の情報や実践が手に入ります。

お問い合わせは 和歌山県事務局 山本周子まで。

第30回全国夏季セミナー（埼玉）は 延期しました

巻頭でもふれましたが、第30回全国夏季セミナーは東日本大震災の影響で規模を縮小して延期になりました。時期は2011年12月24日を中心に行われます。また決まり次第連絡いたします。